

どの謙虚さと、気持の豊かさを持ち合わせているのが、この一冊からも十分に伝わってくる。みずからがかわった、一つの革新政党の末路をどんな思いで見つめているのだろうか。

さらに、実践活動に加えて、文化・思想をめぐる諸々に注ぎまなざしは熱く、その在りようを適確に照射し、問題を提起してやまない、文明批評の眼は鋭い。

小冊子「日本社会主義運動史」モスコ―峡谷のどこに消えたか

究極を尋ねて無限の旅にでるかいくる精神のころよい旅立ち

言葉を惜しめこの饑舌の世に石は一つずつ空にむいてたつ

向坂逸郎文庫図書目録Ⅰ 書く人もなく消えた思想の面白さ

逆光に沈んでゆく巨石がある文明が一つ消えてゆくあたり

「小冊子」とは、氏自身の著書で、新書版二八頁のテキストのことだろう（労働大学刊、一九七七年四月）。幾度か訪ねているソ連の解体後のロシアを丹念に歌う「群作」のなかの一首である。また、向坂逸郎（一八九七―一九八五年）は、氏が師とするマルクス経済学者で、社会主義協会を主宰し、社会党の理論的支柱でもあった。向坂旧蔵書の約七万冊は、法政大学大原社会問題研究所に寄贈され、一九九二年三月によく目録刊行の運びとなり、毎年一冊、五巻が予定されている。その第一巻を手にした感慨がこの一首となったのだろう。没後七年近い年月を経、その間、社会主義諸国の激変をまのあたりにし、向坂経済学をめぐる評価への思いにも格別なものがあったにちがいない。右にあげたのは、知識や表現を超えた、歴史の重さを集約している作品

の一部である。

さらに、短歌ないし作歌そのものをテーマにした作品も散見できる。いずれも伝統短歌への厳しい批判が込められ、しかも、かなりの諷刺やユーモアを漂わせている。

傘を忘れた 軽薄短小の歌のおかげで 電車はずっとすいていったんだ

雨雲の辺からきこえてくるのはやまどうた・定型・骨のずいまで七五調

この歌集には、自歌自注のエッセイ「短歌のある風景」が収録されていて、文学への造詣の深さもうかがえる好読物となっている。木原短歌の原点とも言うべき一首には、「それまで思うともみなかった天皇について、あれこれ考えたのもその獄であった。修飾をとり去り、虚飾をはぎとる努力のなかで、見えてきたものは底しれない権力の深淵にほかならなかった」と自注を添える。

襟もとふかく天皇をみた二十歳の未決監房赤い煉瓦みち

「野を越え」「野を走る」意欲を持續する木原さんの強靱さを、いまの歌壇人の多くは学んで欲しいと思うこと切である。

霧の下には日の当たる里があるその約束だけの峠を越えてゆく

草に隠れるあてはない 走るだけの生きがい草原がある  
きりきざんだ夢と知りながら野を走るものに魅かれる